今月のトピックス

特集 会社訪問 -No.14
関東馬匹運輸有限会社 様

「安全輸送」旗印に長年実績を蓄積
最も大切なのは「馬の快適性」

各地の競馬場で活躍する競走馬たち。サラブレッドはケガをしやすく、物音や閃光に弱いなど、肉体的・精神的に非常にデリケートな動物であり、競走馬の輸送にあたっては細心の注意が要求される。
今回は、創業以来 70 年近くにわたって競走馬輸送を手がけてきた関東馬匹運輸有限会社を訪ね、競走馬輸送における様々な取り組みなどについて話を聞いた。

川崎競馬場から馬運車で輸送した競走馬を船橋競馬場で下ろす。デリケートなサラブレッドの輸送には細心の注意が要求される

■馬の乗り心地を最優先にした「馬運車」 きめ細やかな運転操作で競走馬を勝利に導く

関東馬匹運輸㈲（嶋村きく代代表取締役）の歴史は、昭和 28 年に中山競馬場（船橋市）の近くに拠点を構え、営業を開始した運送会社に端を発している。同社は、設立当時から競馬に出走する競走馬の輸送を手がけており、現在では船橋競馬場（同）の近くに本社を置くほか、日本中央競馬会（JRA）の東日本地区における調教拠点である美浦トレーニング・センターのある茨城県稲敷郡美浦村に美浦営業所を構えている。なお、同社では JRA 所属の競走馬輸送をメインに、大井競馬や船橋競馬、川崎競馬、浦和競馬などの地方競馬に所属する競走馬の輸送も実施。北海道から九州まで、全国各地の競馬場に競走馬の輸送を行っている。

さて、競走馬は体重が約 500kg に及ぶほか、競走馬の価値は数億円に上るケースも珍しくない。その一方で、競走馬は繊細な生き物であるため、慎重に輸送を行う必要がある。そのため、輸送の際には競走馬輸送専用の「馬運車」が使われることになる。同社では 6 台の馬運車を保有している。

馬運車は一般的なトラックとは異なり、馬の乗り心地を考えて、様々な機能を搭載している。馬運車の荷台には 4 頭の競走馬を積載することができる。馬運車走行中の車体の揺れを抑える観点からエアサスペンションが搭載されているほか、馬のいる馬室には馬 2 頭ごとにカメラを 1 台設置。カメラの映像は、運転席に設けられたモニターに送られ、ドライバーが馬の様子を常時確認できるようにしている。馬室はそれほど広くはないため、なかには窮屈な馬室を嫌がるような馬もいるという。しかし、馬室内で馬が暴れてしまうと、馬のけがや馬室の破損につながりかねない。馬室内で馬が暴れそうな素振りを見せた際には、同乗している厩務員が馬室に向かい、馬をなだめて落ち着かせるようにしている。

なお、近郊の競馬場への輸送では日帰り運行となるが、北海道や九州など遠方の競馬場まで遠征することも少なくない。長距離移動するドライバーや厩務員が休めるようなスペースが運転席後ろに設けられており、そこにも馬室の様子を映し出すモニターが設置されている。馬が最高の状態でレースに出走し、勝利をつかみ取るためには、馬にとってストレスの少ない輸送を行うのはもちろんのこと、輸送の間も厩務員による馬の体調確認が欠かせないのである。

馬室。輸送中、馬は馬室内で駐立した状態で運ばれる

馬の様子を常時観察するためのカメラが装備されている

カメラ画像は、運転席などに備え付けられたモニターに映し出される

また、馬は気温 20℃ほどで暑いと感じる。馬室内が暑くなり、馬が汗をかくと、馬がかゆがって暴れることもあるという。そのため、馬室にはエアコンが完備されており、冬季以外は 18 ～ 19℃を維持し、馬が暑さを感じないようにしている。また、馬運車がトンネルに入った際に車内が暗くなるのを嫌がる馬もいるため、輸送中は馬室内の電灯を点けたままにしているという。

さて、同社の馬運車はバスベースのものとなっている。先述したような様々な設備を搭載していることもあり、車両の価格は 1 台およそ 5000 万円もするという。

ドライバーが馬運車に乗り込む際には、バスと同じように車両に向かって右側（助手席側）から乗車する。同社のドライバーが競走馬を輸送する際には、靴を脱いで助手席側の靴置き場に置き、裸足でクラッチペダルやブレーキペダルを踏むようにしているという。

1 台の馬運車には 4 頭の競走馬を積載することができる

馬運車の馬室から競走馬を下ろす。馬は大きな音にも敏感なため、周りの環境に気を配りながら静かに馬運車から下ろしていく

汚れた空気を吸い込むことで起こる馬の輸送熱を防止するため、馬室内の清掃作業は念入りに行う

その秘密について、ドライバーの大石睦恵さん（27 歳）に話を聞いた。

「競走馬を輸送する際に最も気を付けていることは、急発進や急ブレーキを絶対にしないということです。そのためには慎重なブレーキ操作やクラッチペダル操作が求められてきますが、靴を履いた状態では細やかな操作がしづらく、加減速や停車の際に馬に悪い影響を与えかねません。より丁寧なブレーキ操作やクラッチペダル操作を行い、馬の輸送ストレスを少しでも軽減させるために、当社のドライバーは靴を脱いだ状態で運転しています」（大石さん）

競走馬は輸送中、馬室の中で飼い葉を食べたり、排せつを行う。馬を下ろした馬運車は、ドライバーによって馬室の清掃が行われる。清潔な馬室を維持していないと、次に輸送する馬の「輸送熱」の原因となってしまう。清掃を行わないと、馬室には馬の糞（ボロ）や尿などから出るアンモニアガスや、ほこりが充満してくる。輸送熱とは、そうした汚れた空気を輸送中に馬が吸い込むことにより、発熱に至る現象である。重篤化すると肺炎へと進行し、なかには治療の甲斐なく生涯を終えてしまう馬もいるほどである。そのため、輸送が終わって帰庫した際には念入りに洗浄して、輸送時に馬が過ごす馬室を清潔な状態にしている。また、輸送中においても、必要に応じて換気を行い、馬室内の環境を保つようにしているほか、休憩をできるだけ長く確保し、馬のストレス軽減に気を配るようにしている。

繊細な生き物である競走馬を輸送している同社のドライバー。大石さんに、馬運車のドライバーならではのやりがいについて聞いた。

「一般的なトラックに比べて、馬運車を見かける機会が少ないということもあり、走行中も他の車のドライバーさんから注目されることが多いです。また、自分が輸送した競走馬がレースに出走して 1 着になったときには、『事故なく無事に競馬場まで送り届けることができて、本当に良かった』と思いながら運転しています」（同）

さて、嶋村社長はかつて八千代市の運送会社に勤めており、同社で運行管理者資格を取得するなどトラック運送業界での経験を積み重ねてきた。先代社長（嶋村社長の夫である嶋村二三男氏）が平成 18 年に亡くなったことを受け、これまでの経験を生かして会社を守っていくために、嶋村社長は平成 19 年に同社の社長に就任した。

同社が競走馬輸送業務を継続していく上で、最も大事にしているのは「安全輸送」である。レースに勝利するという大きな目標に向かって、調教師や厩務員たちが心を込めて育成してきた、大切な「競走馬」。彼らにとってかけがえのない競走馬の輸送を引き受ける同社では、馬を万全な状態で競馬場まで運ぶために、質の高い輸送サービスを提供している。

同社のドライバーは、一番年上の人でも 47 歳、若い人では 25 歳の人もおり、平均年齢約 40 歳と比較的若いのが特徴である。若いドライバーが馬運車から競走馬を下ろす様子をみていると、テキパキと作業をこなしている仕事ぶりが印象に残った。

「当社の若いドライバーは責任感が強く、先輩ドライバーや厩務員の仕事ぶりを見ながら、安全を意識した作業が自発的にできています。例えば、馬のそばで大声を出すと、馬は驚いて暴れたりするので非常に危険です。当社でも月に 1 度、安全輸送や競走馬の扱い方についての講習を行っていますが、座学からだけでは分からない部分も多々あると思います。多くの人々の夢が詰まった大切な競争馬を事故なく輸送するために、ある意味『馬に教わりながら』若いドライバーたちは経験を積み重ねています」（嶋村社長）

最後に、さらなる輸送サービス向上を目指す同社の今後の姿について、嶋村社長に聞いた。

「当社は競走馬輸送 100%の会社であり、競走馬以外の品物を運ぶなど仕事を増やして会社を大きくしていくというよりは、今の当社の姿を維持しながら、ひとつひとつの仕事を大切にしていきたいと考えています。大切な競走馬を運ぶ運送会社として『安全輸送』を心がけ、輸送サービスに一層磨きをかけていくことで、お客様に喜んでいただけるようにしていきたいと考えています」（同）

ホットにゅーす

自慢の愛車で房総半島をドライブ 気分転換できる大切なひとときに

嶋村社長の趣味はドライブである。

嶋村社長の実家は勝浦にあり、房総丘陵の緑の山々や外房のきらめく海を横目にハンドルを握っていると、日常を忘れることができていい気分転換になるという。

嶋村社長の愛車は、トヨタ自動車のセダン型ハイブリッド車「SAI」。環境に配慮した愛車を操り、自然豊かな房総半島の多彩な魅力を堪能するのも、最高の休日の過ごし方ではないだろうか。

「ドライブが趣味」と話す嶋村社長。愛車の車窓から、外房のきらめく海を見るのが好きだという

企業プロフィール

関東馬匹運輸有限会社

代表取締役　嶋村　きく代

千葉県船橋市浜町 1- 43 -12

従業員　10 人（ドライバー 8 人）

台数　6 台